

令和4年度病害虫発生予報第5号

令和4年7月6日
鳥取県病害虫防除所

予報の概要

区分	農作物名	病害虫名	発生時期	予想発生量
普通作物	イネ	葉いもち	平年並	やや少ない
		穂いもち	平年並	平年並
		紋枯病	平年並	平年並
		縞葉枯病（ヒメトビウンカ）	—	平年並
		セジロウンカ	平年並	平年並
		斑点米カメムシ類	平年並	平年並
		フタオビコヤガ	平年並	やや少ない
果樹	ナシ	黒斑病	—	平年並
		黒星病	—	やや多い
		輪紋病	平年並	平年並
		クワコナカイガラムシ	平年並	平年並
		ハダニ類	やや早い	やや多い
果樹共通	カキ	炭疽病	平年並	やや多い
		樹幹害虫 (ヒメコスカシバ、フタモンマダラメイガ)	平年並	平年並
	ブドウ	べと病	—	やや少ない
	果樹共通	カメムシ類	—	多い
野菜	ネギ	さび病	—	やや少ない
		黒斑病	—	平年並
		白絹病	平年並	やや多い
		軟腐病	平年並	やや多い
		ネギハモグリバエ	—	平年並
		ネギアザミウマ	—	やや多い
	スイカ	つる枯病、炭疽病	—	平年並
		うどんこ病	—	平年並
		褐色腐敗病、疫病	平年並	平年並
		アブラムシ類	—	やや多い
イチゴ	うどんこ病	—	やや多い	
	炭疽病	平年並	平年並	
	アブラムシ類	—	やや多い	
	ハダニ類	—	やや多い	
ナガイモ	炭疽病	平年並	平年並	

気象予報（抜粋）

1 か月予報（7月2日～8月1日：6月30日、広島地方気象台発表）

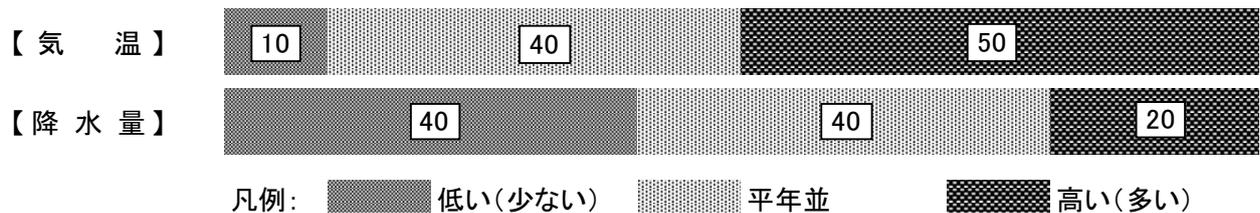
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

期間の前半は平年に比べ曇りや雨の日は少ないでしょう。期間の後半は、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

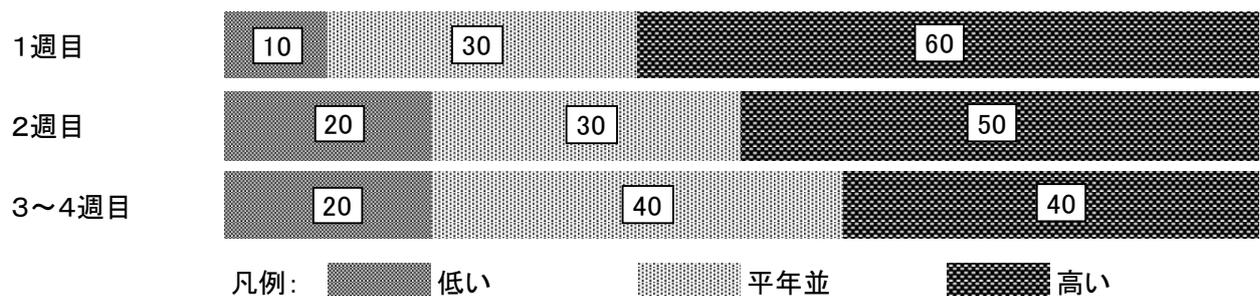
向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。降水量は平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率60%です。2週目は、高い確率50%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

<向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>



<気温経過の各階級の確率(%)>



普通作物

[イネ]

1 葉いもち

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	平年並
発生量	やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 7月1日現在、県予察ほ場（鳥取市橋本）における本病の発生は、平年と同様に認められていない。

イ 7月4日現在、本病の広域発生は確認されていない。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、期間の前半は平年に比べ曇りや雨の日が少なく、期間の後半は平年と同様に晴れの日が多いと予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 上位葉に急性型病斑がみられた場合、病害虫防除指針等を参考にして、直ちに治療効果のある粉剤、水和剤などにより防除を行う。

- イ 「コシヒカリ」、「ひとめぼれ」、「きぬむすめ」などの本病に弱い品種の栽培、窒素肥料の多施用、遅植えなどの条件では特に発生しやすい。
- ウ 補植用置き苗は、本田における発生源となることが多いため、直ちに処分する。
- エ 長期効果持続型の育苗箱施用剤を使用している場合でも、十分な防除効果が得られない場合があるため、ほ場の観察を徹底し、本病の早期発見に努める。
- オ 降雨が続く場合は雨の止み間に防除を行い、適期を失しないようにする（粉剤散布後から降雨が3時間程度なければ、防除効果は十分にある）。
- カ 本田施用粒剤（オリゼメート粒剤等）を使用する場合は予防散布が基本であり、発生後では十分な効果が得られない。なお、粒剤を使用する場合は、各薬剤の使用基準を確認して湛水散布を行う（湛水散布にあたっては、農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項などを確認して、止水期間を少なくとも1週間とするとともに、農薬の流出を防止するために必要な措置を講じるように努める）。
- キ 平成30年からストロビルリン系薬剤耐性菌の広域発生がみられなかった地域では、本系統薬剤の本田地上散布剤及びヘリ防除剤の再使用が可能である。ただし、耐性菌の再発生を防ぐために、本系統薬剤の同一年における連用と採種ほ場及びその周辺ほ場における使用を控える。

2 穂いもち

(1) 予報の内容

発生地域	早期栽培地域及び早生品種栽培地域
発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 6月28日現在、出穂期は平年並と予想されていることから、発生時期は平年並と予想される。
- イ 穂いもちの伝染源となる葉いもちの発生はやや少ないと予想される。
- ウ 向こう1か月の気象予報によると、期間の前半は平年に比べ曇りや雨の日が少なく、期間の後半は平年と同様に晴れの日が多いと予想されている。向こう3か月の気象予報によると、8月は平年に比べ晴れの日が少なくと予想されている。葉いもちの予想発生量と気象予報から、穂いもちの発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 予防防除を基本とし、粉剤又は水和剤を使用する場合は、穂ばらみ期及び穂揃い期に防除を行う。粒剤を使用する場合は、各薬剤の使用基準を確認して湛水散布を行う。
- イ ほ場をよく観察して葉いもちの発生に注意し、本病の早期発見に努める。上位葉に急性型病斑がみられるようであれば、病害虫防除指針などを参考にして、粉剤、水和剤などで葉いもちの防除を行う。

3 紋枯病

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 昨年の本病の発生量は平年並であったため、越冬菌核量は平年並であると予想される。

イ 7月1日現在、県予察ほ場（鳥取市橋本）における本病の発生は平年並である。

ウ 防除効果の高い育苗箱施用剤が普及している。

エ 向こう1か月の気象予報によると、気温は高いと予想されており、本病の発生にやや助長的であるが、上記の内容より、本病の発生時期及び発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

発生が多いほ場では、幼穂形成期から出穂直前までに1～2回の防除を行う。

「コシヒカリ」では、出穂前15～20日の発病株率が25%、穂ばらみ期の発病株率が18%を防除の目安とする。特に、昨年の発生量が多かったほ場では、発生状況に十分注意する。

4 縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 前年の縞葉枯病の発生は平年並であった。

イ 前年のヒメトビウンカの発生は少なく、本種の越冬量は少ないと予想される。

ウ 6月第6半旬現在、ヒメトビウンカの予察灯への誘殺数は平年並である。

エ これまでの経過及び向こう1か月の気象予報から、縞葉枯病及びヒメトビウンカの発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本病の多発地域において、ピメトロジン、フルピリミン又はトリフルメゾピリムを含む育苗箱施用剤を使用していない場合は、病虫害防除指針などを参考にし、7月中旬～下旬頃に水和剤などで本虫の防除を行う。

イ ヒメトビウンカはイネの葉色が濃いほ場に発生しやすいので、窒素過多にならないよう注意する。

5 セジロウンカ

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月第6半旬現在、予察灯への誘殺は確認されていない。

イ これまでの経過及び向こう1か月の気象予報から、発生時期及び発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事

ア 今後、前線が活発化した場合は多飛来の可能性もあるので、ほ場における生息密度に注意するとともに、今後の病虫害発生予察情報を参考にする。

イ 防除適期は、7月第6半旬～8月第1半旬になるものと予想される。発生が多い場合は、病虫害防除指針などを参考にし、粉剤、粒剤などで防除を行う。なお、この時期の要防除水準は10頭（寄生成虫・幼虫数）/株である。

6 斑点米カメムシ類

(1) 予報の内容

発生地域	早期栽培地域及び極早生品種栽培地域
発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 6月28日現在、5月中旬移植のイネの出穂期は平年並と予想されることから、発生時期は平年並と予想される。
- イ 6月第6半旬現在、予察灯へのアカスジカスミカメの総誘殺数はやや少ない。
- ウ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア イネの出穂20日前頃及び出穂期にイネ科雑草の草刈りを行って、カメムシ類の発生源を少なくする。草刈りは地域一斉に行うと効果が高い。ただし、イネの出穂期以降に、穂を付けたイネ科雑草の草刈りを行うと、穂で増殖したカメムシ類を水田に追い込むことになるので、イネ科雑草が穂を付ける前に出穂期の草刈りを行う。
- イ 周辺雑草地にカメムシ類の発生が多い場合は、穂揃い期～乳熟初期に、病害虫防除指針などを参考にして、粉剤、水和剤などを散布する。
- ウ 粒剤を使用する場合は、病害虫防除指針などを参考にして、各薬剤の散布適期に湛水散布を行う（湛水散布にあたっては、農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項などを確認するとともに、止水期間を1週間程度とし、農薬の流出を防止するために必要な措置を講じるように努める）。また、散布後も発生が多い場合は粉剤、水和剤などで追加防除を行う。
- エ 昨年、斑点米の発生が多かった地域では、本種の越冬密度が高い可能性があるため、発生状況には十分注意する。

7 フタオビコヤガ

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	平年並
発生量	やや少ない

(2) 予報の根拠

- ア これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、第2～4世代幼虫の発生時期は平年並の7月第2半旬～8月上旬と予想される。
- イ 6月第6半旬現在、本種の予察灯への総誘殺数及びフェロモントラップ誘殺数はやや少ない。
- ウ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生量はやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 本種に対して効果が高い育苗箱施用剤（スピノサド剤、スピネトラム剤、ジアミド系の殺虫成分を含む育苗箱施用剤）を使用していない場合は、7月第3半旬頃より幼虫の食害が増加し始めると予想される。
- イ 7月中旬以降、穂ばらみ期防除の1週間前までに要防除水準（暫定版：下記の①～③の条件をすべて満たす場合、①発生の主体が1.2cm以上の幼虫、②被害株率90%以上、③食害葉面積率10～20%以上）に達した場合は、病害虫防除指針などを参考にして、直ちに粉剤、水和剤などで防除を行う。
上記の時期に要防除水準に達していない場合は、穂ばらみ期に、粉剤、水和剤などを散布する。

果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発 生 量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 6月中～下旬の現地ほ場における巡回調査の結果、新梢葉の発生量は平年並であり、果実の発生量は平年に比べて少なかった。

イ 6月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場、慣行防除体系）における新梢葉の発生量は平年並である。

ウ 中国地方の梅雨明け（速報値）は6月28日頃であり、平年（7月19日頃）に比べて21日早い。

エ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 降雨により新梢葉の発病が増加するので、新梢葉の発病が多い園では追加防除を検討する。

イ 薬剤は、ベルコートフロアブル1，500倍液、アリエッティC水和剤800倍液、有機銅水和剤（キノンドーフロアブル又はドキリンフロアブル）1，000倍液などを使用する。

ウ 園内の風通しをよくするため、下草の管理を徹底する。

エ 散布にあたっては、薬液が新梢の先端まで十分かかるように丁寧に散布する。

2 黒星病（令和4年6月2日付で令和4年度病害虫発生予察注意報第2号を発表）

(1) 予報の内容

発 生 量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月中旬の現地ほ場における巡回調査の結果、果そう葉の発生量は平年に比べてやや多かった。

イ ‘新甘泉’の果実感受性は7月上旬頃まで高く、7月上旬は連続して降雨がある日が予想されている。

ウ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病した葉や果実は伝染源となるため、できるだけ取り除き、園外に持ち出し処分する。

イ 赤ナシの有袋栽培では、袋掛け直前に薬剤散布を行う。

ウ 薬剤は、かけむらがないように丁寧に散布する。

エ 薬剤は、ベルコートフロアブル1，500倍液、有機銅水和剤（キノンドーフロアブル又はドキリンフロアブル）1，000倍液などを使用する。

3 輪紋病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発 生 量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 今年の発生量はやや多く、伝染源のいぼ皮病斑の量もやや多いと見込まれる。

イ 中国地方の梅雨明け（速報値）は6月28日頃であり、平年（7月19日頃）に比べて21日早い。

ウ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本病の被害は果実袋で予防できるが、袋掛けが遅くなると発病が増加するので早めの袋掛けを心がける。

イ 枝における発病を防ぐため、枝にも薬液がかかるよう注意する。

ウ 薬剤は、ベルコートフロアブル1，500倍液、アリエッティC水和剤800倍液、有機銅水和剤（キノンドーフロアブル又はドキリンフロアブル）1，000倍液などを使用する。

4 クワコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア クワコナカイガラムシ越冬世代のふ化開始は平年並の5月2日（平年：5月2日）、ふ化最盛期は平年並の5月7日（平年：5月8日）であった。

イ 前年度、本種による果実被害量は平年並であったため、越冬世代の発生量も平年並であったと見込まれる。

ウ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、ふ化幼虫の発生盛期は平年並の7月7日頃（平年：7月9日）、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤はダイアジノン水和剤34の1，000倍液、アルバリン顆粒水溶剤2，000倍液などを使用し、連用を避けて輪番散布する。

イ 薬剤の散布にあたっては、カイガラムシ類が集合する枝葉の他、枝の切り口、粗皮などにも十分にかかるようにする。

5 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場、慣行防除体系）におけるカンザワハダニの10葉当たりの寄生個体数は0頭（平年：0頭）と、平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、ハダニ類の発生に好適な条件になると予想され、発生時期はやや早く、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 例年、ハダニ類の密度は、梅雨明け以後の高温乾燥条件下で急激に高まるので、1葉当たりの成虫数1頭を目安に防除を行う。

イ ハダニ類は、種類によって薬剤の効果が異なるので、種類を十分に見極める。また、薬剤の散布にあたっては、連用を避けて、輪番散布する。

ウ 薬剤は、コロマイト乳剤1，500倍液、スターマイトフロアブル2，000倍液、ダニコングフロアブル2，000倍液などを使用する。

6 シンクイムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並～やや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地9地点のフェロモントラップにおけるナシヒメシンクイの発生時期、発生量ともに平年並、モモシンクイガの発生時期は平年並、発生量は平年並～やや多い。

イ 向こう1か月の気象予報から、ナシヒメシンクイの第3回成虫の発生最盛期は平年並の7月中～下旬頃、モモシンクイガ第2回成虫の発生最盛期は平年並の8月上～中旬頃で、発生量は平年並～やや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発生盛期となる7月以降、シンクイムシ類は連続的に発生するため、定期的な薬剤散布により発生密度を低下させる。

イ 薬剤はモスピラン顆粒水溶剤4,000倍液、ダイアジノン水和剤34の1,000倍液、アルバリン顆粒水溶剤2,000倍液、サムコルフロアブル10の5,000倍液、オリオン水和剤40の1,000倍液などを使用する。

ウ 裸果（受粉樹に残っている果実など）はシンクイムシ類の発生源となるので、早急に除去する。

[カ キ]

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 昨年の発生量は多く、越冬伝染源量も多いと見込まれる。

イ 中国地方の梅雨明け（速報値）は6月28日頃であり、平年（7月19日頃）に比べて21日早い。

ウ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本病原菌は、緑色のやわらかい新梢に感染しやすい。

イ 7月上～中旬に徒長枝を中心に園を見回り、発病が認められた枝は必ず切除して、園外に持ち出す。

ウ 薬剤は、7月上～中旬にマンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤又はペンコゼブ水和剤）600倍液などを使用する。

2 樹幹害虫（ヒメコスカシバ、フタモンマダラメイガ）

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 昨年の樹幹害虫の被害は平年並であり、越冬量は平年並と予想される。

イ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 防除は幼虫の食入防止を目的に、春の1回目処理から2～3か月後の7月を目安に処理を行う。
- イ 薬剤はガットサイドSの1.5倍液を樹幹害虫の被害が多い部位（樹幹部や枝基部）を中心に散布又は塗布する。なお、ガットサイドSの使用基準は、使用時期が産卵期～幼虫喰入初期、但し収穫45日前までであるため、特に早生品種では使用時期に注意する。

[ブドウ]

1 ベと病

(1) 予報の内容

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

- ア 6月中旬現在、県予察ほ場（砂丘地農業研究センター）及び現地ほ場において、本病の発生は認められていない。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 本病は連続降雨により発病が助長され、施設栽培ではハウスの谷部など雨に当たりやすい場所や多かん水園での発生が多い。
- イ 発病した葉や果実は伝染源となるため、できるだけ取り除き、園外に持ち出し処分する。
- ウ 薬剤の散布は、園の周辺部や枝葉が混み合ったところなどにかけてむらが出ないように丁寧に散布する。特にハウス栽培では、谷間やビニールのつなぎ目の雨水の流れ込む部位に発病が多いことから、防除の際はこの部分の防除を徹底する。
- エ 薬剤はホライズンドライフロアブル2、500倍液、ムッシュボルドーDFの500倍とクレフノン100倍の混用液、ICボルドー48Qの50倍液などを使用し、散布にあたっては、果実の果粉溶脱に注意する。

[果樹共通（ナシ、カキ、ブドウ、リンゴ、モモ）]

1 カメムシ類（令和4年6月27日付で病虫害発生予察注意報第3号を発表）

(1) 予報の内容

発生量 多い

(2) 予報の根拠

- ア 6月下旬現在、予察灯及び集合フェロモントラップにおけるカメムシ類の誘殺数は平年に比べて多い。
- イ 6月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場、ナシ‘ゴールド二十世紀’、無袋・殺虫剤無散布）において、カメムシ類の果実被害は確認されていない。
- ウ 向こう1か月の気象予報は、カメムシ類の活動に好適な条件であり、発生量は多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

令和4年度病虫害発生予察注意報第3号を参照のこと。

野 菜

[ネギ]

1 さび病

(1) 予報の内容

発 生 量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生量は平年並である。

イ 本病は気温が24℃以上では発生が抑制される。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、オンリーワンフロアブル1,000倍液、ラリー乳剤4,000倍液などを使用する。発病後は、オンリーワンフロアブルにカリグリーンを800倍で混用して散布するか、アミスター20フロアブル2,000倍液、ファンタジスタ顆粒水和剤3,000倍液、カナメフロアブル4,000～8,000倍液、カーニバル水和剤1,000倍液などを散布する。

2 黒斑病

(1) 予報の内容

発 生 量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生量は平年並である。

イ 本病は気温が25℃前後で、降雨が多い場合に多発する。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 根傷み、肥料不足になると発病しやすいので、ほ場の排水を図り、肥培管理に注意する。

イ 薬剤は、ダコニール1000の1,000倍液、ポリベリン水和剤1,500倍液などを使用する。発病後は、ロブラール水和剤1,000～1,500倍液、アミスター20フロアブル2,000倍液、ファンタジスタ顆粒水和剤3,000倍液、シグナムWDG1,500倍液などを散布する。

3 白絹病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発 生 量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生は認められていない。

イ 本病は高温多湿で発病しやすい。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 7月上旬の土寄せ時に、モンカット粒剤10a当たり4～6kg、モンガリット粒剤10a当たり4～6kgなどを株元散布する。

イ 7月中旬以降に発病がみられる場合は、モンカットフロアブル40の2,000倍液、カナメフロアブル4,000～8,000倍液などを株元散布する。

4 軟腐病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生は認められていない。

イ 本病は高温多湿で発病しやすい。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ネギに傷が付くような無理な土寄せや追肥を行うと、発病が助長されるので避ける。

イ 植付後2か月以上経過し、収穫まで1か月以上を要するものには、7月上旬の土寄せ時に、オリゼメート粒剤10a当たり6kgを株元に散布する。

ウ 最終土寄せ前後にナレート水和剤1,000倍液、Zボルドー500倍液、ヨネポン水和剤500倍液、クプロシールド1,000～1,500倍液などを7～10日間隔で2～3回散布する。

5 ネギハモグリバエ

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場におけるネギハモグリバエの発生量は平年に比べて少ない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、アグロスリン乳剤2,000倍液、ディアナSC2,500～5,000倍液、ファインセーブフロアブル2,000倍液、グレース乳剤2,000～3,000倍液、ヨールフロアブル2,500～5,000倍液などを散布する。

6 ネギアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場における本種の発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、ハチハチ乳剤1,000倍液、スピノエース顆粒水和剤2,500～5,000倍液、ディアナSC2,500～5,000倍液、ファインセーブフロアブル1,000～2,000倍液、グレース乳剤2,000～3,000倍液、トクチオン乳剤1,000倍液などを用いて、7～10日間隔で散布する。

[スイカ]

1 つる枯病、炭疽病

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 6月下旬現在、現地調査ほ場におけるつる枯病、炭疽病ともに発生量は平年並である。
- イ つる枯病及び炭疽病は、降雨によって発病が増加する。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア トンネル内が過湿にならないよう適度に換気を行う。
- イ 本病は、株元や雨滴のあたる箇所から発病しやすいので、薬剤散布は株元にも薬剤が付着するように丁寧に行う。
- ウ 雨の日が続くと発病が増加するので、散布間隔を短くし、雨の止み間に防除する。
- エ 薬剤は、ジマンダイセン水和剤600倍液、アントラコール顆粒水和剤600倍液、ダコニール1000の700倍液などを用いて予防散布する。発病後は、ポリベリン水和剤1,000倍液、アミスター20フロアブル2,000倍液、シグナムWDG1,500～2,000倍液などを散布する。

2 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 6月下旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生量は平年並である。
- イ 本病は、25℃前後の気温と乾燥条件で発病が増加する。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

発生初期のほ場では、カリグリーン800倍液、ショウチノスケフロアブル2,000倍液、ポリベリン水和剤1,000倍液などを散布する。つる枯病が同時に発生している場合には、ポリベリン水和剤1,000倍液を散布する。

3 褐色腐敗病、疫病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 6月下旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生は認められていない。
- イ 褐色腐敗病及び疫病は多雨によって発生が増加し、一度発生すると、急速に広がる。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア ほ場の排水を良好にする。特に豪雨時には滞水のないように対策を講じる。
- イ 毎年、疫病の発生するほ場では、ジマンダイセン水和剤400～600倍液を予防散布する。
- ウ 褐色腐敗病の発生ほ場ではリドミルゴールドMZ1,000倍液、ホライズンドライフフロアブル2,500倍液などを散布する。

4 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場におけるアブラムシ類の発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

防除薬剤は、コルト顆粒水和剤4,000倍液、ハチハチフロアブル1,000倍液などを使用する。

5 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場におけるハダニ類の発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

防除薬剤は、マイトコーネフロアブル1,000倍液、ダニサラバフロアブル1,000倍液、コロマイト乳剤1,000倍液などを使用する。

[イチゴ]

1 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場（育苗床）において、本病の発生は認められていない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本ほ場に病原菌を持ち込まないために、育苗期間中の防除を徹底する。

イ 防除にあたっては、葉裏にも薬剤が付着するように丁寧に散布を行う。発病初期までの薬剤は、ベルコート水和剤1,000倍液、サンヨール500～1,000倍液、フルピカフロアブル2,000～倍液などを使用する。

ウ 発病後は、トリフミン水和剤3,000～5,000倍液、モレスタン水和剤3,000～4,000倍液などを散布する。

2 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場（育苗床）において、本病の発生は認められていない。

イ 本病は高温多湿で発病しやすい。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 育苗時、頭上かん水は発生を助長するため、底面給水を行う。

イ 育苗期間中、罹病性品種については、下記の薬剤を定期的に散布する。なお、薬剤散布にあたっては、クラウン部分、葉柄、托葉、及びランナーにも薬液がムラなくかかるように丁寧に散布する。下葉かきによる傷口、ランナーの切り口などから

も感染するので、下葉かきの直後にも薬剤散布を行う。育苗初期の防除を徹底し、発病株は除去する。

ウ 育苗初期は、アミスター20フロアブル2,000倍液、ゲッター水和剤1,000倍液などを散布する。なお、アミスター20フロアブルは薬害が出やすいため、展着剤を加用しない。

エ その後の散布薬剤は、ベルコートフロアブル1,000倍液、デランフロアブル1,000倍液、アントラコール顆粒水和剤500倍液、ジマンダイセン水和剤600倍液などを用いて、7～10日間隔で予防散布する。

3 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地のイチゴ育苗床におけるアブラムシ類の発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、チェス顆粒水和剤5,000倍液、ベストガード水溶剤2,000倍液などを使用する。

4 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地のイチゴ育苗床におけるハダニ類の発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

発生初期からサンヨール500倍液、アーデント水和剤1,000倍液などを散布する。発生量が多い場合はコロマイト水和剤2,000倍液、グレースシア乳剤2,000倍液などを散布する。

[ナガイモ]

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生は認められていない。

イ 本病は降雨によって発病が増加する。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 肥料切れしないように適度な追肥を行う。

イ 薬剤は、ベルコートフロアブル1,000倍液、ダコニール1000の1,000倍液、ジマンダイセン水和剤400～600倍液などを使用し、予防散布する。

[おしらせ]

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、周辺への飛散には十分注意しましょう。

農薬の詳しい登録内容は、農林水産省の「農薬登録情報提供システム」から検索できます (<http://pesticide.maff.go.jp/>)。

なお、農薬の使用や防除指導等に際しては、農薬のラベルを必ず御確認ください。

<鳥取県病害虫防除所ホームページ>

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>



ホームページ2次元コード

病害虫発生予察情報、フェロモントラップ調査結果（ナシのシンクイムシ類ほか）などの参考情報、病害虫の診断方法などの情報をお知らせしていますので、御利用ください。

<お問い合わせ>

普通作物関係：〒680-1142 鳥取市橋本 260

鳥取県病害虫防除所

（電話：0857-53-1345、電子メール：boujyot@titan.ocn.ne.jp）

もしくは

鳥取県農業試験場環境研究室

（電話：0857-53-0721、ファクシミリ：0857-53-0723）

果樹・野菜・花き関係

〒689-2221 東伯郡北栄町由良宿 2048

鳥取県園芸試験場環境研究室

（電話：0858-37-4211、ファクシミリ：0858-37-4822）

※次回、予報第6号の発表は、8月3日（水）の予定です。

なお、予定日と実際の発表日が前後することがありますので、御注意ください。